

すぎとまちこんじゃくしゅういろく 杉戸町の昔拾遺録

温古知新
杉戸の歴史をばれ話

第1回

杉戸町の遺跡を学ぶ

杉戸町には、令和6年現在で62箇所[※]の遺跡が存在します。これらの遺跡を理解するためには、まず杉戸町の地形の特徴を紐解くことが重要です。

杉戸町の地形は、大きく分けて台地（下総台地）と低地（中川低地）に分類できます。低地部には微高地帯である自然堤防と河畔砂丘が見られます。杉戸町域の輪郭は、鳥が大きく翼を広げた姿に例えられ、台地はその右側の翼に位置しています。

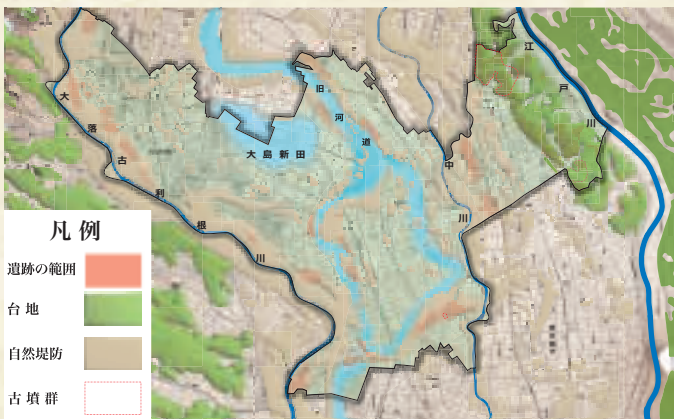
約六千年前の縄文時代には、この台地の領域が人々の生活の中心地でした。その理由は、当時の杉戸町域の大部分が海域で、人々は必然的に台地上に集落を築き、漁労を一つの軸とした生活を営んでいました。この時代の日本は、「縄文海進」と呼ばれる海水準の変動があり、日本列島の内陸深くまで海水が侵入していました。これは、太陽と地球の軌道要素の変化により日射量が増加し、北半球の水床が融解した結果といわれています。そのため、海面は、今より、2m〜3mくらい上昇していたようです。台地上で多くの貝塚が見つかるのは、大昔、海が接しており貝や魚などの海産物を主食の一つとしていた証拠です。

台地上には、時代を問わず多くの遺跡が存在しています。中でも、木津内貝塚（縄文時代前期）、目沼浅間塚古墳（古墳時代後期）、木野川古墳群（古墳時代後期）は、埼玉県選定重要遺跡に指定されています。

一方、杉戸町の低地部には、多くの自然堤防が発達しています。自然堤防とは、河川の両岸に形成された微高地帯のことで、河川から氾濫した濁水が上流域から大量の土砂を運搬し、その土砂が河川の両岸に残ることによって形成されます。かつての大落古利根川は、利根川の本流であり、水量も豊富で多くの洪水を発生させ、それが多くの自然堤防を生み出しました。現在、杉戸町域の自然堤防は、大落古利根川や中川に沿って形成されたものと、今では水流のない旧河道沿いで見ることが出来ます。そして、この自然堤防上には、弥生時代の終わり頃から奈良・平安時代までの遺跡が多く存在しています。

これらの遺跡は、私たちが過去の生活や文化を理解するための重要な手がかりとなります。次回からは、縄文時代を概観してみたいと思います。

（社会教育課 町史・文化財担当編）



杉戸町の遺跡と地形

桜スポットのご紹介

4月上旬、町内各地で桜が満開となりました。桜スポットの一部をご紹介します。

秘書広報課



大落古利根川沿い (清地一丁目)



倉松公園 (大字倉松)



北蓮沼四ヶ村落 (大字北蓮沼)



エコ・スポいずみ (大字木津内)



東丁張児童公園 (高野台東一丁目)



椿地区 (大字椿)



目沼グラウンド (大字目沼)



アグリパークゆめすぎと (大字才羽)



国体記念運動広場 (大字杉戸)



読みやすい書体であるユニバーサルデザイン (UDフォント) を使用しています。



杉戸町
ホームページ



メール配信
すぎとまち



広報スマホ版
マチイロ



杉戸町
公式LINE